

# キルケゴール思想における逆説の問題

馬場智理

はじめに

キルケゴール思想の主要概念の一つに、「逆説 (Paradox)」が挙げられる。キルケゴールは、実存的人間にとつての神との関わりが、もっぱら人間の側からは関係を持ちえないという仕方でのみ関わりうる不条理なものであることを主張する。しかも、その主張が、どこまでも神の不在という人間の実存的状況に定位して発せられることから、キルケゴールの逆説理解は、関係が人間の知的思惟によつては把握しえない逆説以内の何ものであつてもならないという徹底性を帯びてくる。このことは、彼が逆説を説明するにあたり、自らの理解するところの逆説をあえて「絶対的 (absolut) 逆説」と表現していることから窺える。事実、キルケゴールは、逆説を相対化する立場、つまり、人間の側からは知りえないはずの逆説的関係を思惟によつて理解することににより、かえつて本来の逆説性を切り捨ててしまつていような立場を念頭におきながら、逆説を理解している。

したがつて、問題は、そもそも人間の知りえない関係を説明

可能であるとすれば、それはいつたいいかなる仕方によるのかということになる。キルケゴールは、そこに、知らないことは何を知るべきかを知らないことでもあるはずであるからそれを知ることができず、他方、知っていることはすでに知つてしまつているがゆえに改めて知ることはないという、ソクラテスが提起したのと同様の知のアポリアを見いだす。このアポリアに対してキルケゴールがとつたアプローチとは、思惟の限界、あるいは、思惟の否定契機を知ることである。彼は、逆説とは「思惟の情熱 (Tankens Ildenskab)」<sup>①</sup>であり、その「情熱の最高の勢位 (Potents) は、常に自己自身の没落 (Undergang) を欲すること」<sup>②</sup>であると述べ、結局のところ逆説の最高の形態とは、「自らが思惟しえないような何事かを見いだすこと」<sup>③</sup>であると結論づける。人間の思惟は、知らないものを知ることができず、また、知つていることを改めて知ることもないため、思惟しえないにもかかわらず事実として成立する不条理な逆説的事態を理解することができない。この逆説をあえて思惟するならば、不条理性を破棄して論理的に、つまり、関係を明示す

るといふ意味で相対的に捉えることになる。それゆえ、キルケゴールにとって、逆説を「絶対的逆説」として理解することは、どこまでも思惟による理解の否定という仕方でのみ行われるべきなのである。逆説は絶対的でなければならぬとする、一見同語反復ともいふような主張を彼がする理由も、まさにここにあるといえる。

以上のように、キルケゴールの関心は、神との関係が逆説的であることを知ることに留まらず、いかに逆説が逆説たりうるか、関係の逆説性をどう担保するかを示すことにあるのである。そこで、本論文では、キルケゴール思想において、逆説が絶対的逆説としてどのように理解されているかを考察していきたい。

## 第一章 内在性の破断としての超越

キルケゴールが、実存的人間と神との関係について議論を展開する場合、基本的には、従来の形而上学における議論と同様、「内在と超越」という枠組みに依拠している。そして、神は、時間の世界から超越しながら人間と関係する存在として規定される<sup>1)</sup>。キルケゴールは、さしあたってこのように、神を超越的存在と見なす立場に立っている。ただし、「ここで」「さしあたり」と留保しなければならないのは、神の存在が内在ではなく超越であるとするキルケゴールの主張が、それまでの形而上学とは異なる意味合いをもつ対立構図においてなされているからである。形而上学において、神が「内在であるか超越である

か」という問題は、おおむね、神を世界の内在的原理とみなすか、あるいは、世界に超越し世界を創造する原理とみなすかといった対立構図の下に理解される。しかし、キルケゴールのいう神の超越性は、世界における神の内在性を否定し、世界の外部に神の存在を認めるといふ意味での超越性を示すものではない。キルケゴールによれば、神は実存的人間の存在の規定根拠であるがゆえに、神の超越は、世界に対してではなく人間に対しての超越として理解されるべきなのである。したがって、神の超越性は、もっぱら人間の側から神を思惟することの限界性、つまり、人間の思惟の有限性と相即して理解されることになる。ところで、形而上学は、多様な現れ方をする神の普遍的、根本的在り方を解明するために、神の本質の理解をもつてする。近代において人間の認識能力に批判が加えられ、主観による認識の構成という構造的転換を経ることはあっても、神の本質とこれを捉える人間の思惟能力との関係の解明が、形而上学の一貫した課題となっている。端的にいえば、形而上学の目的は、人間の思惟とその対象存在との関係を整合的に説明することにある。形而上学のような特徴を、キルケゴールは「存在と思惟の一致 (Overensstemmelsen mellem Væren og Tanken)」と呼ぶ。

ただし、彼は、形而上学が目的とする「存在と思惟の一致」が、思惟が存在をそれ自体を捉えているという意味での一致ではなく、存在を抽象的に捉えたものが思惟の内容となつていくという意味で一致していることを看取しもしている。したがって、

思惟に基づいて説明される神は、実存的人間が関係する神とは乖離せざるをえない。思惟によって捉えられる神はまた、世界に内在しているようにと超越しているようにと、どこまでも思惟する人間に内在している。キルケゴールが神の内在性を批判するのは、世界への内在ではなく、このような人間への内在という事態に對してである。そして、内在ではなく人間から超越した神との関係を可能とするために、キルケゴールは「経験的に思惟が存在と一致するということとして真理を規定しよう」と、あるいは観念的に存在が思惟と一致することとして真理を規定しようとして、いずれの場合にせよ、存在するということによって何が理解されているかに細心の注意を払うことが重要である」<sup>(5)</sup>と述べる。つまり、実存的人間に對して有する神の存在の意味に、改めて立ち戻ることこそが必要であると考えるのである。

キルケゴールは、人間の内在的理解を超えた超越的の神の存在を説明するために、実存を規定しているところの時間性に着目する。そして、実存的人間が受け取るべき神の現実化の時間こそが、人間の内在的思惟に楔を入れることになるとして、次のように述べる。

もし純粹思惟において、自己における反省と他のものにおける反省の直接的統一について語られ、そして、この直接的統一が廃棄されるということについて語られる場合には、直接的統一の諸契機の間にあるものが入り込まねばならない。それは何か。それは時間である。<sup>(6)</sup>

実存的人間にとって、超越的の神の現実化の時間的意義とは、それが現実化する時間が決定的基点となつて、思惟によって時間の意味を変えることのできない不可変性が時間の内に生じるということである。換言すれば、思惟可能な継時的時間に神の現実化する時間が切り込むことによつて、人間が規定するのではなく、人間を規定する実存的時間が現れる。この実存的時間こそが、思惟しえない神の超越性を人間に知らしめるものとなるのである。

キルケゴールは、以上のように捉えられる神について、「永遠的なものはある特定の場であり、その場は、まさに内在性の破断 (Brudlet med Immanensen) である」<sup>(7)</sup>と述べ、実存的人間にとつての神の現実化の意味を「内在性の破断」<sup>(8)</sup>と捉える。この破断は、次のように説明されている。

・・・しかし、それにもかかわらず内在的移行は、ある立場が、必然的に、自己自身によつて別の場へと向かうごくく規定されている、一つのキマイラ、想像である。なぜなら、移行というカテゴリーそのものは、内在性における破断であり、飛躍である。<sup>(9)</sup>

思惟は、内在的に対象を捉えるがゆえに、神に對する関係を思惟の理解にしたがつて論理的、必然的に解釈する。しかし、逆に神の現実化は、人間の思惟の限界を示す事態である。実存

人間は、この事態に直面して、不可変性を帯びた時間の内に自らが規定されていることを自覚する。そして、この自覚により、実存的時間を生むところの神の現実化を、思惟の内在性を否定する破断として理解することになる。確かに、この内在性の破断は、神と人間との直接的連関を否定することにもなり、それがまた、両者の関係を不明確にするだけの印象を与えることになるかもしれない。だが、その不明確さは、神との関係を思惟する場面において初めて意識化されるのであって、あらかじめ関係がそのようなものであるわけではない。それゆえ、関係の不明確さは、神と関係する実存的人間の有限性に由来するものとして理解されねばならないのである。

このように、内在性の破断は、「内在性の内部においてではなく、内在性に抗して (like indenfor Immanensen men mod Immanensen)」<sup>121</sup>と断られているように、あくまでも思惟の外からもたらされ、思惟の決定的限界を知らしめるものである。そして、この内在性の破断こそが、実存的人間による神との真の関係の内実なのである。それゆえ、この破断は、自らを規定する神との真の関係へと実存的人間を導く契機ともなる。神が内在ではなく超越であるときルケゴールがいうのは、この意味においてなのである。むしろ、形而上学においても、否定的役割を担う超越的神について言及される。しかし、ルケゴールによれば、そこでの理解は抽象的思惟によるものであるがゆえに、否定でも超越でもない<sup>122</sup>。形而上学において思考されるところの神の否定は、思惟の内部で理解される否定であって、

超越的な神による否定ではありえない。超越的神による否定といっても、それが思惟の否定を意味しないかぎり、神による否定と内在性における神による否定とを区別することができる。したがって、いかに超越や否定について説明されるとしても、その説明が思惟に依拠しているというまさにその一点において、「あらゆる思惟は内在性の内にある」<sup>123</sup>といわざるをえないことになるのである。

実存的人間の立場からすれば、思惟による神との関係理解は、苦悩の原因ともなっている。なぜなら、思惟が思惟を否定することはありえないため、思惟する者自身は神を思惟することの問題性すら知ることなく、不適切な行為を続けることになるからである。それゆえ、神の現実化が内在性の破断であり、神はそうした存在として超越的に人間へと関係してくる事態が、まづ知られるべきだといわれるのである。ルケゴールは、神の現実化が、「絶対的に異なるもの」としての神の存在を実存的人間に知らしめる契機となっている事情について、次のように述べる。

つまり、もし神が人間とは絶対的に異なっているとすれば、人間は神とは絶対的に異なっている。だが、知性はこのことをいかにして把握することができるのか。ここで我々は逆説の前に立っているとされる。人間は、神が異なっていると知っていることを知るためにだけさえ神を必要とし、そのようにして人間は、神が自らとは絶対的に異なっていると

うことを知るのである。<sup>13)</sup>

「あらゆる思惟は内在性の内にある」がゆえに、思惟が自身で超越的存在を理解することはできない。それゆえ、関係の相手である神が、自らとは絶対的差異のある存在であることを理解するためだけであつても、まづもつて神と関係を保持している必要がある。そして、そこでの関係の第一義的内容が、内在性の破断なのである。キルケゴールは、このように内在性の破断として関係する超越的神こそ、実存的人間にとつての神であると考えるのである。

## 第二章 内在性から内面性へ

神の現実化が内在性の破断を意味するということから、神が超越的存在であり、しかもその超越は、形而上学において理解されるごとく時間的世界からの超越ではなく、内在的思惟を行う人間に対する超越的な在り方を指示するものとなる。また、このことから、思惟の代わりに提起されることになる信仰が、もつぱら神の存在を信じるだけの盲信とははつきり区別される。内在的思惟の否定と盲信とを同一視する理解には、すでに思惟によつて神を理解可能であることが前提されている。キルケゴールの主張する実存的人間と神との関係は、どこまでも超越的存在としての神を相手としているがゆえに、思惟の否定がすなわち盲信を意味することにはならないのである。それでは、

実存的人間は、逆説性を阻害することなしに、超越的神をどのような仕方で理解しようと考えられているのだろうか。

思惟に一致する存在を思考する形而上学において、神による内在性の破断は、思惟の否定ではなくどこまでも思惟の誤用として解釈され、結局内在的思惟による理解が続けられることになる。キルケゴールはこの事態をして、「悲しき無際限性は限りなくしぶとい生命を有しており、これを克服するには破断が必要である、そしてその時、方法、内在性の巧妙さ、移行の必然性は終わるのである」と述べ、内在性の破断を経ることなしには神との関係は成立しないと主張する。ただし、内在的思惟が否定されるならば、内在性に代わる新たな内的領域が必要となる。キルケゴールは、内在的思惟の「悪しき無際限性」の切れ目、つまり内在的思惟の限界を受け入れる実存的人間の内的領域を「内面性 (Underighed)」と呼ぶ。

神との直接の関係はまさに異教であり、そこに破断が起こつて初めて、そこでは真の神関係が問題たりうるのである。だが、この破断は、真理は内面性であるという規定との関わりにおいてなされる、内面性の最初の行為である。<sup>14)</sup>

神との真なる関係は、内在的思惟の破断をどのように受容するかという仕方の問題となる。すでに述べたように、内在的思惟は「思惟と存在の一致」を目指し、実際には思惟可能な範囲内で存在を思考する。すなわち、内在性においては超越的存在

としての神との関係が考えられているのではなく、神と人間との論理的整合的関係の解明が目標とされている。これに対して、内面性は実存的人間の内的領域であり、内在性の破断を受容する場として措定される。内在性の破断を受容することの内面性は、さらに次のように説明される。

客観的思考が思考主体やその実存に無関心であるのに対して、主体的に思考するものは、実存するものとして、自己自身の思考へと本質的に関心を持ち、その思考の内に実存している。それゆえ、彼の思考は別種の反省、つまり、内面性の反省、所有の反省であつて、それにより、思考は他の誰でもなく主体に属するのである。<sup>116)</sup>

ここでは、神を客観的に理解する思考と、実存的人間として神に関係する場合の思考との違いが述べられている。前者では、思考する人間は、自己自身の存在に無関心な客観的立場にある。それゆえ、ここでは、神との関係に伴う思惟の限界を受容されることはない。これに対して後者では、思考する人間は神と関係する主体である。そうした主体であることによって、人間は実存であることに由来する思惟の限界に直面する。そこでは、神との関係主体であることが、思惟の限界をして、神との関係に基づく人間存在を考える契機となっているのである。キルケゴールは、このような内面性を神との関係の理解の内的領域とし、そこにおいて、内在性の破断の意味を理解するとは口を見

いだそうとする。

それでは、実存的人間は、この内在性の破断に伴う否定の意味を内面性においてはどのように受け取るべきだろうか。キルケゴールによれば、否定性は神と関係することと不可分であり、その限りで実存的人間はそもそも否定的存在であるとされる。

現存在の内にある否定性、より正しくは、実存する主体の否定性は、・・・主体が実存する無限の精神であるという主体の総合に基づいている。無限なるもの、永遠なるものは、唯一の確実なものであるが、しかし、それが主体の内にあるという限り、それは現存在の内にある。そして、それに対する第一の表現は、その欺きと、永遠なるものが生成し、現存するという途方もない矛盾 (Modsigelse) である。<sup>117)</sup>

実存的人間は、永遠なる神との関係の主体として措定されているという意味で永遠性と関わっている。他方で、内在性の破断によって明らかになるのは、神が人間の思惟的理解を超えた存在であるということであった。したがって、神の現実化による内在性の破断は、実存的人間にとって神との関係が矛盾であることを露呈させる。実存的人間は、たとえ「時間的なものと永遠的なものとの総合 (Synthese)」<sup>118)</sup>と規定されて、「あるとしても、神との関係の実際の場面においては、矛盾的關係のうち存在するのである。

実存的人間は、神との関係において矛盾が総合される。ただ

し、実際に実存の人間が知るのは、彼が主体的に思考しうる領域、つまり、関係の矛盾のみである。したがって、神は、もっぱら関係の矛盾を知らしめるといふ形で人間を欺くかのように現れる。このことをして、キルケゴールは神との関係の第一の表現を、「途方もない矛盾」であると称するのである。しかし、主体的に思考している限り、思惟の破断による矛盾が、同時に神との関係に由来する矛盾であることにはかわりはない。実存の人間は、神との関係においてその関係の矛盾を知るにもかわりなく、それによって神との真の関係の方向が閉ざされることにはならないのである。

したがって、神との矛盾的關係にある実存の人間が、否定的性質を負うとしても、それは、ひたすら否定に甘んじることの意味するのではない。内在性の破断が神の現実化の帰結であり、それが神との関係に由来すること、実存の人間の否定性がこのように解釈されるならば、それは単に否定のための否定という意味での否定主義とはならないのである。キルケゴールは、内面性における否定を、肯定との弁証法的構造において捉え、次のように説明している。

無限性を自らの魂の内に持つ、主体的に実存しつつ思考するものは、その無限性を常に持ち、それゆえ、彼の形式は絶えず否定的である。もしそうだとしたら、もし彼が実際に実存し、自らの実存においてこの現存在の形式を言い表すとするならば、彼は実存しながら絶えず否定的であると同時に肯

定的でもある。というのは、彼の肯定性は、継続された内面性の内にあり、その内面化の中で、彼は否定的なものについて知ってゆくのである。<sup>116</sup>

実存の人間は無限なる神と関係することで、自らの有限性、限界を意識することになる。そして、この限界ゆえに、彼は否定されざるをえない。それゆえ、神と関係することによって、関係の主体としての実存の人間の思考は、第一には人間存在の限界の自覚という否定へと向かう。しかし、そこには内在的思惟がなしえなかった自己否定が、内面性において可能となるという意味での肯定性がある。なぜなら、矛盾による否定は、人間が内在的思惟から離れ、神との本来的関係の主体として在ることの証左であるからである。それゆえ、有限性の自覚が否定を克服する方途を開くことにもなる点で、自らの内面性において否定を見だし承認することが、肯定への転換へと通ずるとされるのである。むしろ、この矛盾の総合としての肯定が形而上学の解釈と異なるのが、否定から肯定への転換を思惟によってではなく関係行為において理解する点にあることはいまでもない。キルケゴールは、実存の人間が否定的であると同時にそれ自体で肯定的ともなるところに、内面性の特徴があることを知る。さらに、神との関係において自らが否定されることを知る者は、なにゆえに自らが否定されるのかに留意している肯定性をもっているという意味で、「本来的に主体的に実存し思考する彼は、絶えず肯定的であると同時に否定的であり、また、その

反対でもある<sup>20)</sup>という。内面性においては、神によって内在性が破断されるという否定性を有しながらも、それがまた神と真に関係することを可能とする肯定性が含まれているのである。

以上のように、実存の人間が超越的の神との真の関係を理解する内的領域として、内在性に代わって内面性が指定される。両者の決定的相違は、神との関係を問う者が関係の主体であるかどうかという点にある。内在性は、神との関係を抽象的に思惟する場合の内的領域である。これに対して、内面性は、実存の人間が神との関係の主体として思考する場合の内的領域である。関係主体としての実存の人間の内面性において、神と関係することにより直面する内在性の破断は、神との関係に伴う自己の否定の事態として受け取られるようになる。こうして神と関係することにより、実存の人間は主体として神と関わる肯定性を有する。キルケゴールは、「破断は、内面性を最高の能うべき内面性にする」<sup>21)</sup>と内在性の破断の意義を評価し、内面性においてこそ、神と実存の人間の関係を思考する地平が開かれると考えるのである。

### 第三章 内面性における「逆説」

神の現実化が内在性の破断をもたらすことよって、実存の人間はその内面性において神との関係を矛盾として受け取ることになる。それでは、この矛盾はいかなる形で逆説として関係することになるのだろうか。

キルケゴールによれば、神と実存の人間との関係は、無矛盾的に統一されるのではなく、矛盾であるにもかかわらず関係を成立させる逆説(Paradox)であるという。

実存が逆説的に強調されることの破断は、実存する者と永遠なるものとの関係に介入することはありえない。というのも、永遠なるものがいたるところで実存する者を含んでいるからである。それゆえ、内在性の内部では、誤った関係があり続ける。逆説が成立するというのであれば、永遠なるもの自身は、時間的なものとして、時間の内にあるものとして、歴史的なものとして自らを規定しなければならぬ、それによって、実存する者と時間における永遠なるものは、互いの間で永遠性を獲得する。これが逆説である。<sup>22)</sup>

内在性の破断は、神と実存の人間との関係の矛盾を明らかにする。しかし、矛盾が明らかにされるのが、ただちに両者の関係の成立に資することにはならない。例えば、内在性の破断による矛盾の露呈という事態を、その矛盾の総合という帰結まで含めて理解するというように、もし矛盾とその総合を直接関連づけるならば、それはすでに、神と実存の人間の関係を内在的に思惟していることになる。それゆえ、実存の人間がどこまでも神との矛盾的關係に留まる以外に、逆説的關係が「成立する」<sup>23)</sup>ことはない。「逆説がまさに矛盾を統一するもの」<sup>24)</sup>であるといえるためには、矛盾は矛盾であり続けなければならないの

である。

むしろ、逆説が逆説である以上、その関係を論理的に説明することはできない。キルケゴールは、逆説は絶対的逆説であつて、「相対的区別 (Wortskel) と関わることはありえない」<sup>101</sup>と述べる。これは、逆説が客観的に説明不可能であるということでもある。逆説の内では、矛盾は神と人間の関係の特徴として常に残存している。それにもかかわらず、その矛盾を論理的に思惟するということは、矛盾を同一性的論理の上に措定し相対化することになる。それゆえ、キルケゴールは、思惟によつて矛盾を排除することも、関係の論理とすることもない。つまり、矛盾律に従つて関係の矛盾を認めないカントの立場にも、矛盾そのものに関係の契機を見いだし積極的役割を認めるヘーゲルの立場にも与しない。特に矛盾を体系の中に位置づけるヘーゲルに関しては、「矛盾という言葉は、ここでは、ヘーゲル自身が考え、あるいは他の人に思惟させたように、矛盾が何かを生み出す力を持っているかのごとく脆弱な理解がされるべきではない」<sup>102</sup>と批判する。ヘーゲルの弁証法的論理は、矛盾するものを抽象的論理の中に位置づけることでその克服が主張されている。だが、そこには、矛盾を生起させている神との人間との絶対的な差異が、論理の中で相対的なものとして扱われる欺瞞性がある。矛盾はどこまでも絶対的差異に由来するのであつて、関係を説明するために相対的なものに変換することは許されない。キルケゴールの考える絶対的逆説とは、このように実存的人間と神との絶対的差異に基づく矛盾が伏在しつつ成立してい

る関係なのである。

内在性の破断として現れてくる神の理解が、実存的人間の内面性において可能となるのにしたが、神との逆説的關係も内面性ではなく内面性において理解される。では、内面性において、矛盾がどのようにして逆説として理解されてゆくのか。キルケゴールが逆説について述べている次の一文を見てみよう。

永遠なる本質的真理が実存する者と関係することによつて、逆説が現れる。先に進み、永遠なる本質的真理自体が逆説であると想定してみよう。いかにして逆説は現れるのか。永遠に本質的な真理と実存することが同時に (sammen) 措定されることによつてである。実存することが真理自体と同時に措定されるならば、その時真理は逆説となる。永遠の真理は時間の内に現れる。その真理は逆説である。直前で行われたことによれば、主体は罪ゆえに永遠において自己自身を取り戻すことを妨げられているが、今や、そのことを心配するべきではない。というのは、今や永遠の本質的真理は、真理自体が実存し、あるいは実存したことによつて、主体の後ろにあるのではなく前に来るからであり、したがつて、個人が実存しないならば、実存の内にはないならば、真理を、決して真理を手に入れることはない。<sup>103</sup>

この引用の前半では、逆説の発現は、永遠なる真理と実存することが同時的であることに、換言すれば、実存の人間が神と

の関係行為を現在においてなすことに由来するといわれている。その場合、関係が逆説的に成立するとしても、関係の主体としての実存的人間が、その逆説的關係を直接理解することはできない。その意味で、神との関係は逆説的なのである。さらに、その逆説は、「破断 (Bruch) であるような弁証法的矛盾、つまり、時間における永遠なる救いを時間における他なるもの (Ander) への関係によって期待すること、この矛盾において実存は逆説的に強調され、この実存が逆説的に強調されることよって、この世の事とあの世の事 (Theoghnisse) との違いが絶対的に規定される」<sup>127)</sup>といわれているように、神との関係を希求するほどに矛盾がより露わになる特徴を有している。逆説とは、実存的人間には思惟しえない仕方で成り立つ神との関係なのである。したがって、キルケゴールは、矛盾を「実存することが逆説的に強調されるということに対する一つの新たな表現である」<sup>128)</sup>とみなす。すなわち、実存的人間にとって、神との関係を理解する契機は、自らの内面において関係の矛盾を認めること以外にないと考えるのである。

引用の後半部では、神との関係が矛盾として現れることを「心配する必要はない」ともいわれている。むしろ、それは人間にとって矛盾はいかんともしがたく、逆説に関して思考することは無意味であるということではない。前述のように、永遠的真理は実存的人間にとって逆説となるのであり、逆にいえば、「永遠の本質的真理自体は決して逆説ではない」<sup>129)</sup>。神との関係が逆説であるのは、どこまでもその関係の主体が実存的人間である

ことに由来するのである<sup>130)</sup>。したがって、キルケゴールは、逆説が逆説たる所以を次の点に求める。「絶対的逆説は、それがまさに逆説的なものであるがゆえに、人間が神から区別されるというような絶対的区別にのみ関係しうるのであって、・・・神と人間との間の絶対的区別は、まさに人間が単独で実存する存在者であるということである」<sup>131)</sup>。両者の関係は、神の側では無矛盾的に成立しているかもしれないが（それについて人間が思惟することはできない）、少なくとも思惟の有限性をもつ人間にとっては、矛盾として現れるほかないのである。神と実存的人間との関係は、矛盾が意識されるのに比例して真の關係に近づくと「逆説」である。したがって、神に直接関わりえないことを心配する必要がないとされるのも、内面性において矛盾を意識できれば、それがすなわち逆説的關係の内存在していることになるからなのである。

このように、逆説において神が超越的存在として顕現しているがゆえに、実存的人間にとって逆説が畏怖すべき関係であることもまた、否定しがたい。

そうして、逆説はさらに恐るべきものとなる、あるいは、同じ逆説が二重性を持つ。その二重性によって、逆説は絶対的なものとして現れる。否定的には、罪の絶対的差異性をもたらすことによつて、肯定的には、その絶対的差異性を絶対的同等性へともたらすことによつて。<sup>132)</sup>

逆説は矛盾する差異が同一化された関係ではなく、絶対的差異性が絶対的同等性となつて、二重性を有した関係である。それゆえ、神と逆説的關係にある実存の人間は、ただ絶対的差異によつて否定されている存在でも、絶対的差異の解消された肯定的存在でもない。キルケゴールは、逆説的關係において矛盾を負い躓く実存の人間の姿に、ただ自己の罪を悔い、あるいは、神による救済を待ち望むだけの人間像を投影するのではなく、むしろ思惟に固執する内在的領域を脱し超越的存在たる神との畏怖すべき関係へと向かう、否定的でもあり肯定的でもある実存の人間を見いだすのである。

#### おわりに

神と実存の人間の間には絶対的差異が介在し、その限りで矛盾した関係であるにもかかわらず、それを超越的存在としての神との関係として引き受けるというまさにそのことが、関係を成立させることにもなる。キルケゴールは、実存の人間と神との逆説的關係をこのように理解する。実存の人間にとつて、神は内在的に思惟不可能な存在として現れる。それは、実存の人間が、超越的の神に關係するからである。実存の人間は、神との關係を逆説として理解するための条件を神自身から与えらる。その条件をなすのが、キルケゴール固有の時間論に基づく時間性である。その時間性は、神の現実化という決定的時間を基点として生起する実存的時間である。この実存的時間に依拠

することによつて、神が内在的思惟を限界づける超越的存在として位置づけられる。そして、実存の内面性においてこの時間性を自覚することが、自己否定を迫る超越的存在としての神と關係することになるのである。

キルケゴールは、実存の人間が主体となつて、超越的の神と関わる關係を逆説と規定する。超越的の神は、もはや人間の思惟を越えた存在であるがゆえに、逆説もまた、思惟によつて理解することはできない。それゆえ、「絶対的逆説は、理解されえないということについてのみ理解されうる」<sup>33</sup> というべきほかない。だが、キルケゴールの主張の本意は、超越的存在としての神との關係行為が逆説においてなされるためには、まずもつて逆説が思惟によつては理解されないこと、換言すれば、逆説はまさに思惟を断念したところに現れていることを、指摘することにあるのである。彼はそうした逆説の特徴をふまえて、「私が証明に固執する間は、存在は現れでてこない、それは、何か特別な理由からではなく、私がまさにそれを証明しようとするからである。しかし、私が証明をやめるならば、現実存在はそこに現れている」<sup>34</sup> といささかアイロニカルな表現でもつて逆説を説明するのである。

#### 註

キルケゴールの著作からの引用は、『批評的新版全集』（略記号 SKS）*Søren Kierkegaards Skrifter*, udg. bd. 1-55, G.E.C. GADSD Forlag, København 1997. を使用し、巻数と頁数を示した。

- (1) SKS 4, 242.  
 (2) SKS 4, 243.  
 (3) *ibid.*  
 (4) 例えば、「反復」においては、ギリシア哲学や近代哲学が内在的理解に終始している一方、反復は超越的なものであるとして次のようにいわれている。「反復は私にとつてもあまりに超越的である。私は自己自身の中をめぐることができない。しかし、自己自身を超えめぐることができない。」(SKS 4, 57)  
 (5) SKS 7, 173.  
 (6) SKS 7, 286.  
 (7) SKS 7, 519.  
 (8) 「破断」と訳出した「Brud」は、動詞の原義に従えば「破壊」とするのが通常であり、辞書でもそのように定義されている。他方で、邦訳の慣例では、継起的时间を「断つこと」「Standung」と関連つけるキルケゴールの意図を汲み取って、「Brud」は「断絶」と訳されている。このBrudは、単に連続的なものを切断するだけではなく、古い状態から新しい状態への突破という運動の意も汲みとり「破断」と訳出した。
- (9) SKS 7, 269.  
 (10) SKS 7, 520.  
 (11) 内在的思惟によって否定を理解しようとするれば、確かに超越的存在によって否定されることの論理的な説明が可能で

ある。しかしながら、そこで否定をおこなう超越的存在は、論理の中に位置づけられているがゆえに、内在的思惟は自らを否定する超越的存在を自らの論理の内に措定するという、奇妙な現象が生じてくる。例えば、ヘーゲルの弁証法的思考も、否定を媒介として超越的存在である他者との関わりの中で自己理解を行うことを目指していると考えることができるが、キルケゴールは内在的思惟による否定の説明の陥穽を、ヘーゲル思想を念頭において次のように指摘している。

否定的なものは、ここでは運動の内在性であり、消失するもの、廃棄されるものである。……しかし、論理学において何ごとかを生起させようとするならば、否定的なものはそれ以上のものになる、それは対立をもたらし、否定ではなく反定立 (Contraposition) となる。否定的なものは、その時、内在的運動の中で鳴りを潜めるのではなく、必然の他者 (det nødvendige Andet) である。それは、確かに論理学にとつて運動を進行させるために最も必要であるが、それは否定的なものではない。(SKS 4, 321.)

ここで問題となっている否定とは、あるものがその状態が存在している継続を断ち、それに変化を生じさせるものことである。しかし、内在的思惟に基づく論理は、それ

自体内在的一貫性を持ち自己完結的に事柄を説明するものであるがゆえに、究極的にはその前後で変化のある否定運動を捉えることができない。内在的思惟が外的な契機を含まず自己のうちで完結しているならば、内在的思惟は、自らを超越し否定契機となる存在を、内在的論理の中に措定することになる。キルケゴールは、そのように内在的思惟によって理解された否定は、自らの存在の否定ではなく、自己に対して別の存在者を置くという意味で反定立であるとする。そして、自己を否定する他者も、内在的論理を超えたところから否定する他者ではなく、自らを否定するよう想定された他者として論理の中に組み込まれているがゆえに、「必然の他者」と呼ぶ。したがって、内在性において、他者によって否定されることなく、他者を思惟する人間存在が存続しているという意味では、内在的思惟の説明する否定は否定ではないとされるのである。

- (12) SKS 7, 94.
- (13) SKS 4, 251.
- (14) SKS 7, 309.
- (15) SKS 7, 221.
- (16) SKS 7, 73.
- (17) SKS 7, 81.
- (18) 「……人間は心と肉体との総合であったが、同時に、時間的なものと永遠なるものとの総合でもある。」(SKS 4, 388.)
- (19) SKS 7, 84.

- (20) *ibid.*
- (21) SKS 7, 520.
- (22) SKS 7, 484.
- (23) SKS 4, 248.
- (24) SKS 7, 198.
- (25) SKS 4, 285, *ann.*
- (26) SKS 7, 191-192.
- (27) SKS 7, 518.
- (28) SKS 7, 523.
- (29) SVS 7, 187.
- (30) 二つでキルケゴールは、絶対的に異なりながらも成立する関係の可能性を、論理的に基礎づけるのではなく、両者の存在論的差異の内に見いだそうとしている。キルケゴールの逆説に関しては、それが人間の個別性を強調するあまり矛盾を残さざるをえない形式論理に陥っており、結局はヘーゲルの批判対象の圏内に留まっているという見解がある。「今、私たちは、キルケゴールにおける逆説は、彼が純粹同一性の立場を固守して、一切の媒介を忌避するところに成立するものであることを知るのである。このかぎり、キルケゴールの実存弁証法は、論理においては、形式論理的な立場によって立てられた弁証法であるといえるのである。」(上妻精「ヘーゲルから見たキルケゴール」『理想』55号、理想社、1979年、159頁。)しかし、キルケゴールのいう逆説は、このような形式論理的か弁証法的かという

図式が形而上学での分類であるにすぎず、「絶対的に異なるもの」の存在やそれとの関係には言及できないという批判から生み出されている。したがって、関係の対象を「絶対的に異なるもの」とし、関係を「逆説」と規定するとしても、それは論理的把握とは別の次元からの理解であり、形式論理的であるという批判は妥当しない。前述の引用にある、存在の理解に関してヘーゲルよりカントを優れているとするキルケゴールの発言も、神と人間が論理の次元では結びつかないという観点から評価されているのであって、形式論理的理論であるからではない。

(31) SVS 7, 198-199.

(32) SKS 4, 252.

(33) SKS 7, 199.

(34) SKS 4, 248.

(ぼぼ・ともみち 筑波大学大学院人文社会科学研究所)